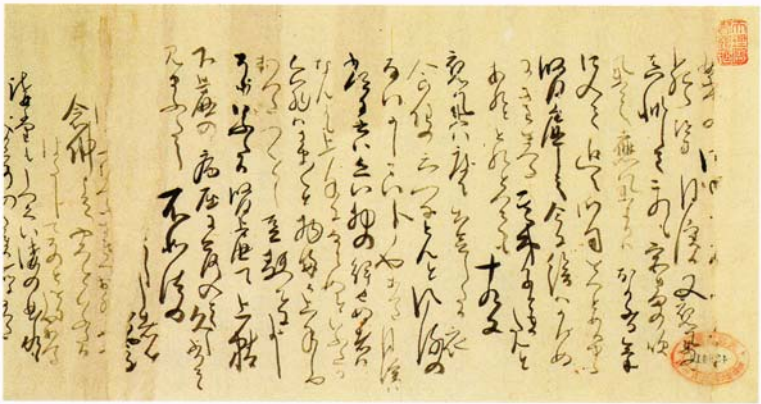
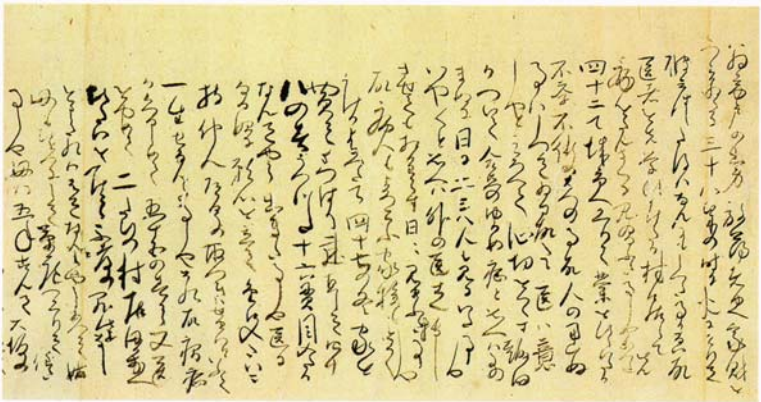
やまとの名品

天理図書館





胆大小心録（たんだいしょうしんろく）（上田秋成自筆）

文化５年（1808）写　７軸

縦23.5cm

上田秋成（一七三四～一八〇九）晩年の文化五年（一八〇八）に成立した随筆集。書名は唐の遜思邈の「胆欲大、而心欲小（胆は大ならんことを欲し、心は小ならんことを欲す）」（『旧唐書』遜思邈伝など）に基づいて後の人がつけたものである。

宗教、国史、茶道、和歌に関する考えや、学問上の考証、あるいは自らの事など、関心事のすべてが独特な語り口で書かれており、中でも知友に対する批評は辛辣である。

本居宣長には「ひが言をいふて也とも弟子ほしや古事記伝兵衛と人はいふとも」と宣長の代表作「古事記伝」をかけ、「偽りを言ってまでも弟子が欲しいのか、乞食同様だと人に言われても」と詠んでいる。画家の円山応挙にも「衣食住の三つにとんと風流のない、かしこい人じゃあつた」としながらも「画料のたかき事、……是も応挙が俗慾ではじまつた」と評している。

秋成は本書の中で、大坂から金五十両を持って上京したが、その金も一、二年で無くなり、本屋に頼まれた事をして十二、三年は過ごしたが、もう何も出来なく、ただ煎茶を飲んで死を待つのみと書いているように、晩年は妻に先立たれ子供も無く孤独な生活をおくっている。

生活に困っても世間におもねるような文筆はしなかったが、晩年は世俗の事柄にこだわる事もなくなり、自由に自己のおもむくままに書き連ねている。本書は秋成の精神・思想の総決算であり、秋成を知る最良の資料といえよう。

（天理図書館　西林　淳）